

ブルとホセの生涯

成瀬 廉二

はじめに

一般市民にとって「南極」から連想される事からの第1位は「寒さ」、第2位がペンギンまたは犬ではないかと思う。特に、映画『南極物語』（1983年）とテレビドラマ『南極大陸』（2011年）のいずれも、主人公は隊員のモデルあるいは作り上げた架空の人物であったが、ストーリーの主軸はタロ・ジロを中心とする犬たちであり、これらを観賞した人々には、「南極＝犬」が強く印象づけられているようである。

事実、筆者も多くの人から「南極では今でも犬橇を使っていますか?」、「今も、昭和基地に犬はいるの?」、「基地ではペットとして飼っているのでしょうか?」などと何回か尋ねられたことがある。



写真：昭和基地におけるタロ・ジロ・トチ
(3次4次交代期：1960年1月頃：吉田栄夫*撮影)

タロ・ジロ（写真）は有名だが、我が10次隊がともに暮らしたブルとホセについては、いきさつや終末が関係者以外にはほとんど知られていない。1991年に採択された環境保護に関する南極条約議定書にて、南極地域への外来生物の持ちこみ禁止が明文化されたため、南極観測隊に同行した犬はブル・ホセが最後となった。

ブルやホセについて記述された資料は必ずしも多くはないが、筆者が調べることができた限りにおいて、ブルとホセの生涯を小史としてまとめたので、10次隊越冬記録の1節として公開したい。

南極へ移住

ブルとホセが日本を発ったのは1965年11月のことで、南極観測再開の7次隊に連れられ、1966年1月から昭和基地に居を構えた。木村征男『南極越冬新聞』によると、「ブル・ホセの兄弟犬は、7次越冬隊が生物研究用備品として連れてきたものである」とのことである。7次隊には生物担当隊員（松田達郎）が越冬していたので、何らかの「研究」を計画していたのかもしれない。しかし、1年後、このブル・ホセを引き継いだ8次越冬隊の吉田（栄）は、「ブル・ホセが生物実験用に使われたということは、なかったようです。村山さんが、いろいろ慮って、そのような名目にしたのでしょう。問題がありそうだったので、詳しくは聞くことを躊躇しました」と語っている（吉田、私信）。

さらに吉田の証言により、ブル・ホセの“出生の秘密”が明らかとなった。それは以下のようなものである。吉田が4次隊の往路ケープタウンで、ベルギー隊からグリーンランド・ハスキーの小さい子犬をプレゼントされた。吉田は4次夏隊の犬係（芳賀良一：生物）の指導の下、宗谷船内で4時間おきにミルクを飲ませて育てた。ベルギー隊から「ベルジカあるいはベルガと呼んでくれ」と言われたこの犬は、4次隊にて越冬後日本へ連れて帰り、さらにその1年後村山**が帰国した後は夏に山荘で飼ったりしていた。吉田は、「その血をひいているのが、ブルあるいはホセだったと思います」と言う。

Belgica は、19世紀末の南極探検船の名前にもなっているので、女性の名であろう。そうすると、ブルまたはホセ、あるいは両者とも、グリーンランド・ハスキー犬を母とし、樺太犬の父との、すなわちヨーロッパ系とアジア系との混血である。

ブル昇天

ブルとホセは、この2匹のみで、7次、8次、9次隊で越冬した。もちろん、犬橇として使われることはなかった。10次隊の越冬開始（1969年）間もない頃から、ブルは元気がなくなった。足が痛いのか、いつも前足か後足の1本を地面から浮かせていた記憶がある。『南極越冬新聞』には、「4月6日、安藤、上田両隊員がネスオイヤ島へ散歩に連れ出したのを境に、急に衰弱がひどくなってきた。ほとんど歩けないところから、吉川ドクターはレントゲンをとって見たが骨に異常はない」とある。

そして、4月12日付『S10トピックス』No. 51は以下の様に報じた（復刻版より）。
「我等の大先輩ブル公が、今朝方静かに昇天した。

各人それぞれ思い出もあろう。その思い出を胸に、ブル公の昇天する煙を見つめる目が、思いなしかうるんでいる人も多かった。神もまた、ブル公を迎える美しい雪を蒔き、彼の生前の罪を許したもうたであらう。

あゝブル公よ……。寂しく吠えるホセに幸い多きことを祈る。(Ko)」

同日午後、ブルの告別式が喪主（犬係）渡部により天測点下でとり行われ、荼毘に付された。『10次隊越冬日誌』（石田・蜂須賀）の4月12日欄には「ブル死亡（告

別式行う) 享年7歳9か月」と記されている。年齢が随分詳しいが、日誌の記録者であった石田恭市(気象)は7次越冬隊の犬係でもあったので、ブル等の「身分証明書」か「備品の登録書」を所持していたのかもしれない。なお、享年は数え年で言うのが普通だが、この場合は月まで付しているので満年齢と思われる。そうだとすると、ブルの誕生年月は1961年7月となる。母親ベルジカが帰国したのは1961年3、4月なので、すぐ相方が見つかったとすれば、日数の計算は合うようだ。

ホセ大往生

ホセはその後数年間、孤独に耐えて昭和基地で過ごした。11次隊のホームページには、「可哀想なホセ」として写真が掲載されている。

14次隊で筆者はホセと再会しているはずだが、全く記憶にない。10次および14次隊にてブルやホセを撮った写真は、白黒か、ネガかポジのフィルムの状態ならどこかにあるのかも知れないが、手元では見つからない。

吉田(栄)は、「15次越冬隊では森脇君(地学)が可愛がっていました。私が16次夏で昭和基地を訪れたとき、ホセは私を覚えていたようです」と述懐している。もしこれが本当なら、面影か、音色か、匂いによるのか、犬が7年も主人の記憶をとどめていたとは凄いことである。

Kaoru と称する人のホームページに「お父さんの南極体験」というページがあり、17次越冬隊の機械担当隊員(氏名不詳)がホセについて綴っている。以下、その一部を抜粋して示す。

「昭和基地には、ホセと名付けたアイドル犬がいました。(略)ホセは、体重55kg、身長2mの灰白色大型の樺太犬です。(略)私達17次隊が1976年2月1日基地を引き継いでまもなく、2月12日17時、老衰で亡くなりました。(略)クサリで繋がれていた場所(飯場棟という建物の前40m)で亡くなっていました。14日13時よりホセを準隊員として慰霊祭を催しました。(略)2日後の15日、ホセの木箱は、ヘリ空輸で観測船ふじへ、16次隊の方達とともに帰国、生まれ故郷の北海道へ帰ったそうです」

ホセの生年は不明だが、ブルと同年代だとすると、死亡したときは14歳半ということになる。樺太犬にとって昭和基地は暮らしやすい所だったかどうかは分からないが、長い一生の70%は南極で過ごし、大往生だったと言えるのではないだろうか。

(注) *吉田栄夫：2次夏、4次冬、8次冬、16次夏、20次夏、22次冬、27次夏。

**村山雅美：1次夏、2次夏、3次冬、5次冬、7次夏、9次冬、15次夏。